



一昨年、創立百三十周年を迎えて同窓会主催でシール店内の広場で「下商展」や「下商物語(DVD)」という百三十年の本校の歩みを映像化して卒業生による「トークショー」を行いました。その後、開催された同窓会総会も全国から非常に多くの方がお見えになり大盛況でしたが、その際に、「下商の初代校長先生のことについて教えてもらえませんか」とある方からのご依頼がありましたので、本校にある資料などを基にして分かる範囲で紹介してみたいと思います。若干、筆者の推測した箇所もありますが、何せ古い時代のことですからお許し下さい。

明治十七年に地元の期待を担ってスタートした時の初代校長先生(正式には当時所長)は、大分県中津市出身の中村英吉先生でした。現在、分かっている範囲で調べてみますと、「中村 英吉(明治十七年十月から十九年四月商業)先生は、本校の創立委員で最も活躍された関谷植造(福澤諭吉の交詢社の一員、その関係で福澤諭吉から推薦)の影響で慶応義塾出身(明治七年十二月入塾)で(福澤諭吉と同郷で縁続き)、当時は東京で出版関係の仕事(明治十年頃慶応出版社で働き福澤諭吉と身近に生活)をされ、明治十四年頃に日本橋の貿易商社で役員をされたようです。その後、縁

あつて二十三歳で本校に就任されました。在任中は、寄宿舎の設置や夜学科の設置に努力されました。非常に雄弁だったことから本校初の部活動の講演部(明治三十年)創部に関係があるようです。参考までに、彼が赴任されるまでにとのような演説をされたか調べてみますと、「小国維持法(明治十三年二月)」、「舶来品拒絶之弁(同年三月)」、「榮譽論(同年五月)」、「近來學問の品格落ちたるに非ざるか(同年六月)」、「休息の説(同年六月)」と実に数多くの演説を精力的にされています。中村先生の開校時の明治期の商業学校設立とその教育方針が述べられた祝文を現代文にして表記してみました。開校当時の熱い思いが伝わってくるようです。

「およそ物事の進歩改良は、その詳細を研究しなければならぬ。現在、欧米諸國が富國強國で、世界を制覇しているのは、この研究のためである。農業、商業その他各種の事象について深く學術的研究を究めて日進月歩を遂げている。その學術的研究のうちで究めて錯綜して、しかも一國の盛衰が関わっているのは商業である。この商業の歴史の起源がいかに古いかはわからぬものとしても、近世未だに商売学があるということを開いたことがない。今や、開明の國となつて、この國の力量は欧米の日進月歩の學術の進歩のおかげで日に日に進歩して、欧米に匹敵するようになってきたが、極めて重要な商売については依然として未発達で世間もこれをなまじりにしている。当地、下関の有志諸君は、早くもこの点に着目して、この赤間商業講習所を設置して、少年子弟を大いに商業に従事せしめんとしていることは、見事な行いといふべきであり、日本にとつても誠に喜ばしいことである。不肖、この中村英吉が、この講習所の所長を拝命してこの任に当たること名なつた。この身は、短才淺学で諸君の希望に沿わないことがあるかもしれないが、現在商業を研究し

て、且つ商家の子弟の教育にさらなる改良をはかることが急務だという認識は、この英吉も諸君に譲らないところである。このことが短学淺学を顧みず敢えてこの重責を引き受けた所以です。諸君の好意と助力を得て、当講習所の隆盛が些かでも好結果となるように希望しています。」

本校最初の規則は、政府の商業学校通則に一応は拠つていたものの、随所に明治十五年当時の神戸商業講習所(現在の星稜高校)の校則・教則等を範としており、創立当時の神戸商業の教育方針である「実技実學尊重」の教育を参照して、赤間商業講習所も理論に偏することもなく、手足の自由に動く実用的な人物の養成を目指して商業実習教育の推進に意を用いたようです。

最後に、退任後の詳しいことは分かりませんが、明治二十五年の三月頃に、実に三十一歳というこれらという若さで惜しまれて大阪で逝去されたようです。